奴隷王女の「死ねばいいのに」は結構辛い。

廻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奴隷王女の「死ねばいいのに」は結構辛い。

【Ｎコード】

Ｎ８３２９Ｙ

【作者名】

廻

【あらすじ】

ん？　え？　わたし？　名前は、言えないなぁ。ほら、バレちゃったら殺されちゃうし。まあ、二つ言うとするなら、わたしは元王女で――――――今は、奴隷やってます。そんな、わたしこと、せーちん（♀）がお送りする、奴隷が主人公のお話し。恋愛？　ここに恋愛要素を感じられたら、あなたは立派な変態だよ。

元王女。今は奴隷。

奴隷。まあ、わたしは、そんな御身分。

とある極悪商会の不正を暴くために潜り込んでいる、王国の秘密組織の諜報員の一人、とかではなく、掛け値なしの、奴隷女。

見た目は、自分で言うのもなんだけど、結構可愛いと思う。

肩で切り揃えられた髪の毛は、まあ汚れとかで臭いけど、洗えば鴉の濡れ羽のようだと、昔のご主人様に言われた気がするし、肌も、いろいろ傷がついて膿んだりしているから汚いけど、昔は真っ白だった。

そんなわたしは、今は昔、とある王国の王女様だった。

だけども、なんだか、革命が起っちゃったみたいで、わたし逃亡中。

その途中に、この奴隷商のクソ豚に捕まえられて、鉄の手錠なんかはめられて、首には呪い付きの首輪なんかはめられちゃって、犬みたい。

いつのまにか、眉間には皺が寄っていて。

とあるご主人様に声をかけられて振り向いたとき、「なんだその顔はっ！」と殴られてしまった。余計に不細工になってしまって、また同じ商会に売り捨てられたけど。

手首も首も、膿だらけ。血がこびり付いて、ヤな臭い。

けど、これはまだマシな方なのだそうだ。クソ豚が言うには、だけど。

昔、肩口が膿んでいた女性がいて、クソ豚がほったらかして各地を転々としていると、運悪く、虫が群生しているところに行ってし

まい――ここからは言わなくてもいいと思うけど、うん、虫が沸いたらしい。
うねうねと、幼虫が出たり入ったり。
泣き叫ぶ女がうるさいから、そのまま殺してしまったらしいけど――惜しいことをした、なんて言っていた。
そのときは、殺してやろうかと思ったけど。
それは、首と手についている呪いの枷が、許さない。

これをかけた所有者の意にそぐわぬことすれば、激痛が奔る仕組み。
昔、強く反発した女性が発端で、これをつけるのが始まったらしいけど、いい迷惑だ。本当に。
まあ、それでも強く反発する女性がいたらしいが――痛みにのたうちまわり、あっけなく泡を吹いて、目を白黒させて、絶命したそうだ。
それからというもの、クソ豚に逆らうのは暗黙の了解として禁止ということに、この商会の女性の間ではなっているらしい。

そこまでして生きたいのか？　と言われれば、そんなのは愚問だと、答えるしかない。
生きたくない人間なんて、死んでしまえ。さっさと死んで、その溜めに溜めた幸せな思考をする余裕を、わたしに分けてもらいたい。少しでもいいから。
死にたい人間なんてのも、ここにはいない。
ときどき、泣きながら、「死にたい死にたい」と蹲っている女性を見るけど、やっぱりその娘も自分で命を断とうとはしない。死にたいのなら、クソ豚に反抗すればいいだけなのに、それをしないのは、やっぱり死にたくないからだ。
元王女のわたしが言うのはなんだけど、本当に、クソッタレな世

の中だと思う。
こんな世の中にでも、人の不幸せを狙い澄ましたかのように陥れ、嘲笑っている人間がいて、そのせいで泣き叫んでいる人もいる。
わたしも、そうだったから。
奴隷の剣闘士の戦いなんかを見て、はしゃいでた。
それが、今となっては――その側なんだけど。

こんな世界にも、なんだか最近、希望と呼ばれるものが出来たらしく、勇者の一団が、王国から魔王をやっつけに出立したらしい。

『勇　　者』ウェルナ・イーケット。
『連立世界』エル・ウェグナー。
『創造輪廻』ルシル・ヘルファーデ。
『天　　災』シェーナ・アクザリオン。

フザケタことに、勇者以外は全員美女らしい。それも、絶世の。
死ねばいいのに。
それ以上にフザケタことと言えば、勇者たちの目的、魔王の打倒だろうかね？
そんなことをして、どうしようというのか。
魔王がいるのは、魔帝国と呼ばれるところで、魔族と呼ばれる種族が暮らしているらしい。その姿はほとんど人間と一緒で、だけど、瞳は絶対にオッドアイなのだそう。
なんだか、その国は他の国とは仲が悪いらしい――なんて軽い言葉で片付けるのはいけないのかもしれないけど、簡単に言えばそんなモノなんだろう。

王国側の意見は、こうだ。
『我々の雌伏の時は、今終わった。魔族に虐げられてきた歴史を、今、今こそ！　塗り替えるのである。聖人君子の如き勇者と、その

仲間たちが、必ずや！　その夢をかなえてくれるであろうことを、私は信じているッ！！』

だそうだ。

死ねばいいのに。

虐げられたから虐げるとか、低次元にもほどがある。低次元というかなんというか、次元に存在して欲しくない。いっそのこと死んでしまえ。

死ねばいいのに。

そんな思想を持つ奴ら、全員、死ねばいいのに。

魔帝国の人たちにも、絶対、なにかしらがある。

なかったとしても、そんなことはどうでもいいんだけど。

だって、王国だって、あるのかないのか分からないような理由で、魔帝国の人たちを、根絶やしにしようとしているんだから。

まあ、わたしには、何の関係も無いお話なのだけれど。

嬉しいことといえば、まあ、今日のスープはクソ豚が奮発したみたいで、美味しかったということぐらいかな？

それに、最近危機感を覚え始めているのは、奴隷仲間の女の子たちが、若干百合に目覚め始めていること。時々、寝ているそばで、可愛らしい花の声が聞こえる。

わたしも、昨日誘われた。「やらないか？」だって。

やらねえよ、ばか。

そんなある日のこと、わたしはいつもどおり際どい服を着て、薄暗いホールでくねくね蠢いて観客――わたしの将来のご主人様たちを誘惑していた。

なるたけ、優しそうな人に。なるたけ、なるたけ、だけど。

わたしの夢は、もう、絶対に咲かないってことは、分かっているから。高望みはしないように、している。

小説では、こういうとき、勇者がドアをぶち破って、「なんてことを！」とか嘆くらしいけど、そんなことは望んでもいない。
で、大体は、一人の女の子が昔、自分に何かしらの関係があった女の子に似たりしていて、女の子も優しくされて一目惚れだとか――腐ればいいのに。
そんな幻想、殺されてしまえ。
甘いものは、苦いんだよ。

そんなわたしは、今日もせっせとくねくね動いて、未来のご主人様たちを誘惑。
していると、

ばがん！　とドアを蹴破って、金髪碧眼の優男がどなり声を上げながら入って来た。

それから、護衛の人たちが戦ったけど、金髪碧眼の優男は光とか出してめっちゃ無双してた。ずばァ、とか、ブッシャァ！　とか。
――いや、待てよ？　このパターン、嫌な予感がする。
まてまてまてまてまてまてまて、まってちょーだい！
ちょ、「あなたたちのために戦ってます」的な雰囲気とかどーでもいいから、説教とか口鞭叩かなくていいから！
わたしの未来のご主人様たちを、ぶっ飛ばさないでえええええええええ！

三十分後。
なんだか強そうな大男を、「だけど俺は負けない」的なことをほざいて、きらきら輝きながら倒した金髪碧眼の優男は、呆然と立ち尽くすわたしの方に歩いてくる。
何を思っているのか、わたしを見て、「き、きみは！」とかなんとか言いだして、はっとなってばっとなって、フッと達観したよう

な顔になったかと思うと、こう言うのだった。

「一緒に、来るかい？」

わたしは、言葉が出なかった。

うれしい？　感動？

あー、はいはい。いいお話だね、うん、最高だよ。小説だったら、の話だけど。

今ね、きみ、分かってるかな？　うんうん、分からないよね、温室育ちの勇者くんには。わたしもその分からない気持ちは分かるよ？　温室出身だし。

だからね？　教えてあげるよ。

「――死ねばいいのに！！」

勇者について行ったら、命がいくつあっても足りるかボケェ！！

元奴隷。今は被害者。

結果。結果？　本当、どうしてくれるんだよユウシャサマ。
わたし、職を失ったじゃないでござーせんか。
いや、ね？　考えても見てくださいよ。奴隷って言ってもね？
無理矢理連れて来られて無理矢理奴隷にさせられた人と、無理矢理連れて来られたけど最終的に納得している人と、お金が無くて最終的に自分を売った人と、極悪犯罪人が奴隷にされているケースとかあるんですよ？
そしてね？　奴隷って言うのは、もうこの世界に根強く根付いているんだから、こんなことをしても無意味。というよりも、世界にとっては大きな損失とも言えるんだ。

で、わたしが最終的に言いたいことは、

「あなた、馬鹿ですか？」

この一言なわけ。
おわかり？　自分がしたこと、わかってる？
世界中の奴隷を解放したとして、その後何が待ってるっていうんだ？　その全員の面倒を見てくれるとでも？
戯言だね。そんなの、温室育ちの勇者くんにはわからないだろうけど、そんなことはムリ。
奴隷商人だって、きちんと秩序ぐらいはある。
無理矢理人をさらうケースなんて極稀。大抵は、人身売買。

だから、その後に待ってるのは、また奴隷。

勇者くん。あなたがしたことは、そんなことなんだよ。

「馬鹿じゃあないさ。俺だって、結構考えて助けたんだ」

「その考えとやらを聞かせてください」

そう尋ねるわたし。

「元居た場所に返してあげるのさ」

元居た場所なんてない人はどうすんだよバカ勇者。バカ王子。アホの子。

死ねばいいのに。

考えなしの男なんて、すべからく地獄に落ちてしまえ。

なんてことは言えるはずも無く、わたしは、いつにない怒りを押さえながら、ヤサシーク、テーネーに教えてあげることにした。

わたしって、偉い。

「いいですか、勇者さま。元居た場所が無い人は、どうするおつもりですか？　もしくは、いた場所を追われた人や、自分から奴隷になった人」

「む？　元居た場所が無い人などいるのか？　それに、追われた人にはその場所の人と和解してもらえばいいし、自分から奴隷になった人はまた人生の再スタートと思って、やり直せばいいだけではないか？」

出来ないから、奴隷になったんだろうが。

物凄く頑張れば出来ていたはず、なんてのは幸せ者の発想なんだから。
奴隷になる直前だって、物凄く頑張ったはずなんだから。死に物狂いだったはずなんだから。
最初に出来なかったことは、最後まで出来ないんだよ。
ファンタジーの小説じゃあるまいし。ちょっと手を抜いていて、あとから本気を出したら楽勝でした、なんてことは絶対ない。

「どうでもいいですけど、わたしは、あなたにはついて行きませんから」

大事なこと。勇者なんかについていったら命がいくつあっても足りない。
伝説の剣なんて抜けるはずなんて、そんなこと、絶対にない。

「なんで。俺についてくれれば、君が心配しているようなことにはならないはずだよ」

なるんだよ、あほ。
だから第二王子はアホの子って囁かれるんだよ、あほ。

「しつこい男は嫌われますよ、勇者さま。わたしなんかより、ほら、あなたの後ろでわたしのこと物凄く睨んでる人たちとか、めっさ美人じゃないですか」

「なんですの、あなた。今さっきから、ウェルナ様になれなれしく、しつれいですわ」

そう言ってくるのは、金髪碧眼の美女。物凄い美女。
それ以外は特徴なし。特筆すべき点は、美人。ただそれだけ。

ぷっ、没個性。消えていなくなればいいのに。

「エル、言い過ぎだ。我が主が気にかけているのだから」

そう言うのは紫髪紫瞳の美女。物凄い美女。

なんだか、人間じゃないっぽい。怖い。がくぶる。

「ルシル、これ以上女の子が増えたら、ご主人様の体もたないよー。まさに精を絞りとられるっていうかさー」

そう言うのは、橙髪橙眼の美少女。

元気っ娘。抱きつきたい。もふもふしたい。わふわふ。

「落ち着いてよ、三人とも。俺は、この人と話をしてるんだから」

「「「はい（ああ）（は～い）」」」

死ねばいいのに。

◆◆（、・ω・、）◆◆

逃げ出した。

一日ゆっくり考えてくれ、と言われて、まあ、逃げだした。

あんな女たちと一緒にいるのは嫌だし、あの勇者と一緒にいるの

も嫌だし、っていうか、あのハーレム要員になるとか、考えただけでも吐き気がする。
なんだって、わたしの生活を奪ったアホの子のために腰振らなきゃならんのだ。
わたしの婿さんは、農家の優しいお兄さんって相場が決まってるの。おわかりかな、坊や。

「……逃げてきたのはいいけど、ここ、どこだろう」

無計画過ぎたかな。
こんな、こんな襤褸衣のような恰好じゃどこにも泊めてもらえないだろうし、物乞いをするにも、なんだかなあって感じだし。
それに、早くこの街からでないと追手が絶対に来る。
あの手の男は、わたしの過去に辛いことがあってなんやらこうやらとか、余計な御世話を焼きたがるんだ。

まあなんにしても、お腹が減った。
誰か飯くれ。

「ひーれほーろひー」

あ、馬鹿だ。馬鹿がいる。
なんだか、冒険者っぽい格好をした、酔っ払いの青年がいる。

……あの男の、ヒモになる！

思い立ったが吉日。わたしは出来るだけ楚々とした雰囲気を出して、青年の下に近づく。

「あ、あの」

「んあ、どーしたのですか？　いやあ、僕、仲間に馬鹿みたいに飲まされてしまって、こんなじょーきょーになっているのであります、上官殿ォォ！」

「きゃあ！？」

いきなり抱きついてきやがった。

なんかわたし、上官殿になってるし。泥酔か。泥酔泥酔。

「うーん、おねえさん、いい匂いがしますね～。くんくん」

変態だ、と思ったけど、待てよ？　それはないはずだけど。もう、一週間は体を拭いてないはずだし。クソ豚の血とか最後に浴びたまま、自分でも吐き気を催すほど臭いし。

「そんなことありませんよ」

「いえいえ。優しい人間の臭いがしますよ～。くんくん」

こらっ。どこ嗅いでる。

じゃなくて。そんなお色気はわたしに求めるでない。みたいのなら娼館にでも行ってくれ。

「あの、わたし、住む場所が無くって」

「うん、そうなのですか？　あはは、それならそうと、早く言ってくれればいいものを。僕の家でいいのなら、泊ってもかまいませんよ」

「え、ありがとうございますっ！」

やばい、わたし、猫かぶりがうま過ぎる。

まあ、そのまま監禁とかされるかもしれないけど、それはそれで、働かなくていいから楽そうだし。

「あの、お名前を聞いても？」

「ん、ああ、僕の名前ですか？　ええ、僕の名前は――」

「探せ、探せェ！　まだこの近くにいるはずだ！　魔王が、この街に現れた！」

え？

「――――アルベル・フォン・レグナント。魔帝国の領主ですよ」

ええ？

「まあ、なんですか。騒がしくなってきたようですし、ちょっと場所を変えましょう」

指パッチン。

地面に魔法陣が浮かび上がってって――――――え？

視界が暗転して断線したかと思うと、すぐさま風景は細やかな線に変わって、そのなかでたゆたっていると、わたしの身体は、見知らぬ、お城のような場所に出ていた。

「ようこそ。おねえさん」

そう言って、地面に大の字になって倒れていたわたしを見下ろす、冒険者風の青年。
瞳は、金と銀の、オッドアイ。
ああ、魔族じゃん。
「僕のお城に、ようこそ」
うん。
なんだか、魔王に拉致られた。

元奴隷。今は被害者。（後書き）

手抜き感溢れるッ！

ご感想ご批判等々、お願いします。

元被害者。今は自由人。

わたしは、なんだか魔王さんちに来ちゃったみたいで、物凄く荘厳というかなんというか、まさか人類の敵の本拠地にいきなりワープするとか、わたしも大概だな、とか。

色々思ったけど、なんていうか、魔王さんがめっさ気さくな人だったっていう新事実。

「せーちん、困ったことは無いですか？」

「あ、大丈夫ですはい。ものすごく居心地がいいです」

「そう。それはよかったです」

そう言ってニッコリ笑って、わたしにあてがってくれた部屋に入ってくる魔王さん。

格好は、わたしと会った時のオサレな冒険者風の服ではなくって、ホントの王様みたいな、黒系の服。

わたしの服も、最初はなんだかやばいぐらいゴージャスな服になりそうだったけど、わたしが嫌がっているのを見て、自然と変えてくれた。

魔王さん、やばい。

笑えるぐらいいい人。

人間なんて、死ねばいいのに。

おっと、自分まで死ぬところだった。

「魔王さん、政務とかは良いんですかい？」

「うーん。どっちかっていいますと、最近人間の侵攻が過激になってきているから良くは無いんですけど、僕の部下は有能な人が多いので」

なんだか儚げに微笑む魔王さん。

わたしのイメージとしては、大口開いてがっはっはっはーとか笑ってそうなイメージだったんだけど、気のせいかな。

おじいちゃんに聞いた話でも、なんだかそんなこと言ってたし。

曰く、『両の手に人間を捕まえ、その巨大な口で噛み千切る』とか。

ばかめ、この魔王さんがどうしてそんなことをするっていうんだい。いや、したらしたで、ギャップがあり過ぎて怖いんだけども。

「あ、それは僕の父上の話ですよ」

魔王さん、あなた、心が読めるんですね。びっくりです。

「ええ、読心術といいますか。意外と簡単ですよ。相手の細やかな機微を目で追って行けば、なんとなくわかるモノです。あとは、一般的な思考パターンを取捨選択です」

「それが出来たら、世界は混沌の渦ですね」

「はい。だから、出来ないほうがいいですよ。僕は、生まれたときから出来ましたから」

それは残酷。
……なるほど。こうやって、わたしがほんの数ミリ目を俯かせたことだけでも、わたしの心情が理解できるんだ。

「って、お父さんですか？」

「ええ、父上です。僕とは違って、豪快な人でしたから」

うーむ、父親ということは、魔王さんとはかなり容姿が似ているんだろうかね？
似ているんだとしたら、この顔に、髭をつけたして、少しだけ精悍な感じにすると――うん？

「いえ、似てない親子でしたから」

そういうことか。

まあ、それから、お色気ムード以外は大体の雰囲気を漂わせて、いつの間にか夕方が来ていた。
人とのお話が楽しいと思ったのは久方ぶり。
人ではないけど、まあ、細かいことを気にしたら負けだね。

「そういえば、あの日、なんで人間の国になんて来てたんですか？
変装もしないで」

それが疑問。
なんていうか、一瞬あのとき、馬鹿だと思った自分がいるからなおのこと気になる。もしかして、本当は、魔王さんはアホの子なんじゃないのかと。

「なんていうか、人間の国は楽しいですからね。いやいや、変装はしていたんですけど、酔った勢いで魔法も解いちゃって」

肩をすくめる魔王さん。

なんだ、アホの子か。

「それだけじゃなくてですね、一応、僕の敵である勇者の姿を拝もうと、勇者がその国によるのを見計らって行ったんですよ」

あ、計算高いアホの子か。

勇者さまよりかは、大分上のランク。どうせ、いまでも勇者さまは、自分の役目を忘れて、「あの娘はどこにっ」とかって騒いでるんだろうな。

おかし過ぎて、笑いもでねえよ。

「で、勇者を見たご感想は？」

「なんというか――偏った善、と言いますか。偏っていない善と言いますか。僕が見た限りでは、勇者と言うより、ただの善人にしか見えませんでした」

勇者と善人は違う。

そう言いたいんだろうか。

まさしくその通りなんだけど、わたしにとっては、どちらも同じような存在。

厄介事しか周りに振りまかないという点においては、まあ、どちらも同じ。その厄介事を自分で振りまいておきながら、それを解決した後は達成感とか感じちゃってる人。周囲の人も、それに気付かず素直に喜ぶだけ。

そこで、魔王さんが指を丸めて、グーをわたしの前に出した。

「勇者、とは、なんでしょうか？」

思いつく限りでいいので、教えてください、と魔王さん。

ふむ。

わたしが考える勇者って言うのは、まあ、前述したこと――というわけじゃないんだよな。

「勇気を振り絞って立ち上がる者。勇ましさの意味を追いかける者。臆病な自分を捨て去る勇気がある者、とか。まあ、いろいろですよね」

「ふむ。そうなのですか」

民衆の間では、まあ、『強い』やら『カッコいい』やら言われてるけど、原点に立ち返ってみればそんなところ。

ちなみに、わたしの考えるところの英雄と勇者は違う。

英雄は、負けてもすぐに立ち上がれる者。泣いてもまた笑える者。誰でもなれる者だ。

「せーちんは、物知りなのですね」

「いえいえ。それほどでも」

「僕はですね、せーちん。なんというか、非戦争主義者なんですよ」

「わかります」

「それで、どのようにしたら人間との戦争を回避できるか、いつも日向ぼっこをしながら考えているのですが――」

うわー、ゆるいな。

まあ、これぐらいゆるくないと、本物の王様ってのは務まらないんだと思うけど。

わたしのお父さんは、厳格過ぎたから。国民の全てを管理しようとして、失敗して、革命を起こされて、殺されちゃった。

だから、お父さんに、魔王さんのゆるさが少しでもあればと思えば、なんだか、胸が苦しい。

「――なんとなく、思いつきましたよ。せーちんを見ていたら、なんだか、答えが見えてきたような気がします」

「え？　わたし、ですか？」

「ええ、貴女ですよ」

そう言って、ニッコリ微笑む魔王さん。

わたしに、平和へと導く要素がどこにあったというんだろうかこの人は。

小さいころから、奴隷剣闘士の闘技を見て、きゃっきゃっ喜んでたような女に、何を見たというんだろうか？

「大事なのは、後悔すること。ですかね、せーちん」

「？」

わたしが、後悔？

なんのこっちゃ。

たしかに、わたしの人生後悔だらけの人生だったけど、後悔したからと言ってなにがどうなるわけでもないし。

「まあ、僕の戯言だと思って、聞き流してください。――さて、そろそろ晩餐ですから、お開きとしましょう」

「は、はい」

なんだか、魔王さんの様子がおかしいような。

出入り口である可愛らしいドアの方に歩いて行く魔王さんの背中を見つめながら、わたしは首を傾いでいた。

「では、せーちん。また」

「はい」

乾いた音を出して、ドアを閉めた魔王さん。

その背中は、なんだか儚げに見えた。

◆◆（、・ω・、）？◆◆

小さい頃のわたしは、深窓の少女って感じで、本ばかり読んでいた。

その頃のわたしは、子供で、英雄譚とか冒険譚とか、無駄に脚色

された、そんなお話が大好きだった。
そこには、夢があって、希望があった。
そこには、物語があって、終わりがあった。
中でも、特に読み耽ったのは、『不幸な御姫様を勇者が助ける』お話。

不幸でもないのに、わたしはその不幸な御姫様と自分とを重ね合わせて、いつの日か、この世界から連れ出してくれるものだと信じていた。
この世界って言っても、それは全然不幸なものなんかじゃなかった。世間一般から言えば、喉から手を出して、それで握手をするぐらいに羨ましい生活だったと思う。今思えば、羨ましいから。

だけど、無機質だった。
笑ってるのに、なんだかそれも、誰かの気分取りみたいな気がして、気が気じゃなかった。
だけど、物語の世界は、わたしを満たしてくれたから。

誰も傷つかない、空想物語。
思い届かず、砕け散って行った。
心。声。体。

だからだと、思う。
革命が起ってから、わたしの心が、声が、体が、なんとなくだけど、違う形でだけど、満たされていったのは。

◆◆（、；３）っ◆◆

元被害者。今は自由人。（後書き）

千本桜、夜に紛れ――ッ！

いい曲だ。

ご感想ご批判ご指摘等々、お待ちしております。

自由人。今も自由人。

朝起きたら。
まあ、多分朝だと思うけど、ちちちちって鳥が囀ってるし、給仕の人とかが慌ただしく動いてるのがわかる。
まあ、そんなこんなで、朝起きたら。
全裸だったっていう。
いや、そんなはずはない。昨日は、ちゃんと服を着て寝たはずだ。男を招き入れた覚えも無いし、抱かれた記憶も無い。
……なんだ、自分で脱いだだけか。脱ぎ癖、治さなきゃな。

朝の少しひんやりとした空気を全身で感じながら、欠伸をして、服に袖を通す。パリっとしていて、とても着心地がいい。
この、スタイリッシュなカジュアルな感じ。
僅かばかりの胸がシャツを押し上げているのが見えて、わたしも女なんだなって、そう実感する。あんまり実感ないけど。
男だろうが女だろうが、大差ない。

次々服に袖を通していくと、なんだかそれは見覚えのあるものになって行く。
っていうより、これ男モノの執事服じゃねえか。
なんてもん女性の部屋に置いてんだ。思わず、自然に着ちまったじゃねえか。
姿見で全身を見てみると――やだ、かっこいい。

「いや、自分の姿に見惚れるのはどうかと思うよ、わたし……」
いや、折角だからこのまま男装しちまいましょう。うん、それがいい。
後ろ髪を結って、短くまとめて、耳を大きく出す。いつもより表情をキリっとさせて、軽く化粧もして――うん、男装の麗人の完成だ。

白い手袋、イカスー！
ネクタイ、カッケー！

そこで、不意に、後ろからがちゃりと。
わたしが、めっさ興奮してはしゃいでる所に、後ろからがちゃりと。

「せーちん、朝ご飯の用意が出来ましたよ」

魔王さんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんっ！
やばい、恥ずかしい。なんてところを見てくれるってそこぉ！
固まるんじゃないっ！
いや、不可効力なんだよ、本当に。女の子が男の格好をしたくなるのは不可効力なのでございます。

「うん、似合っていますよ、せーちん。男装が似合うって、本当に美人さんでしたね」

……うん。褒め言葉が痛い。痛いよ、魔王さん。

「い、いいから、ご飯食べに行きましょう、魔王さんっ」

顔を赤くしながらそう言うわたし。
やばい、涙が出そうです。黒い瞳が、折角の黒い瞳が、涙で濁りそう。

「ええ。行きましょう」

そう言うと、微笑みながら手を伸ばしてくる魔王さん。
……ずるいと、思う。
わたしは、顔を真っ赤にしたまま、つまむように、その手を取った。

◆◆（#・ω・）◆◆

荘厳なお城の、静かな庭で。
わたしと、魔王さん。
木にもたれかかって、日向ぼっこ。

「千と百、一と零。
一と零の間に広がっている世界は、わたしじゃ届かない。
千と百の間に広がっている世界は、わたしには狭すぎる。
わたしの居場所はどこなのでしょう、どこなのでしょう。
教えてください、神さま。全て知っているというのなら」

昔聞いた、とある小説の詩の一節だったような気がする。
これに、曲をつけた歌が、わたしは凄く好きだった。
なんだか、それを聞いていると、心がほわほわして、どこか遠くにいけるような気がしたから。
けど、詩は、自分の場所が分からないと嘆いている。
だから、どこにも行けない、自家撞着。

「ああ、その詩ですか」

「え、魔王さん知ってるんですか？」

「そうですね。僕も、よく口ずさんでいましたから。まあ、僕の場合は、自己感傷に浸っている時だけですから。とくに、戦争のあとなんかは、よく聞きましたよ」

金と銀の瞳を細めて、そう微笑んでくる魔王さん。
っていうか、恥ずかしいんですけれども。なんだか聴かれてたっぽくて、恥ずかしいんですけど。

「あなたとわたし、だれかとあなた。
あなたとわたしの間に広がっている世界は、とても鈍く見えた。
だれかとあなたの間に広がっている世界は、とても輝いて見えた。
だからわたしは去りましょう、大好きです。
気付いてください、わたし。無知のふりなどやめてください」

それは、二番だったか。
とある小説の第二節の最後にある詩だったと思う。
けど、こっちの方は曲になっていないので、あんまり知られてないはずだけど。

「僕の母上が、よく口ずさんでいましたから」

「そう言えば、魔王さんの両親は？」

「ん、ああ、殺されましたよ。よくあるお話ですよ。平和活動中に人間に殺される魔族、なんていうお話は」

それすらも、にこやかに微笑みながら、言った。

そこで気付いた。

ああ、この人なりの、処世術なんだなって。

仮面、か。偽るための、面皮。だから、絶対にはがさない。はがさせない。

きっと、仮面を脱いだら、この人は――鬼になる。

本物の、魔王になる。

「最後も、口ずさんでいましたね。父上と寄りそうように、下腹を破裂させて、死にました」

「……えっと、どんなリアクションをとればいいのやら、ハテナなんですけど」

きっと、今のわたしは、この執事服の格好で朝ご飯を食べに行った時、周りにいた人たちと同じぐらい困惑していると思う。

「はは、笑ってくだされば、それで」

笑えるわけねえだろ。ここで笑えるほど、人間やめてねえし。

「せーちんは、やはり優しい人間なんですね。怒れるときに怒れる。くだらないことでも、ちゃんと怒ります。そんな人間は、あまりいません」

「いえ、わたしの場合は、ただ感情を隠してないだけですから。って、また心を読みましたね？　セクハラです」

わたしの言葉にも、語弊があるかな。
隠していないんじゃなくて、隠せないだけ。

「せーちんは、だれかの心を覗きたいと思ったこと、ありますか？」

「ありますね。そりゃ、ありますよ」

今、あの人の気持ちが知りたいとか、どうだとか、気になる。
通りすがりの人の気持でも覗けたら、さぞ面白いんだと思うけど。

「心っていうのは、複雑でしてね。あの子が好きだ、殺したい。あ笑ってる、気持ち悪いな。なんであんなことするんだろう、羨ましい。そんな風に、人の心っていうのは、混ざっているんです。それも、真逆の感情も」

「……それは」

確かにそうだけど。
凄いと思ったら、妬ましく感じるし。
好きだと思ったら、殺したいぐらい愛おしくなってくる。

「だからですね、せーちん。純粋なんて言葉、嘘なんですよ。濁って無い人なんて、いません。そして――濁っているからこそ、そこ

に、美を求めるんでしょう？　そこに、理想を求めるんでしょう？
人は、完成型には興味が無いから。不完全なその姿を見て、より想像を膨らませるから、美しく感じる」

「魔王さん……けど、完成を求めるのもまた、人ですよ」

「はい。だからこそ、僕は平和の完成を目指し続けるんでしょう。きっと、平和が完成したのなら、この世界はつまらないものになってしまうんじゃないか――なんて思って活動する革命家は、いませんから」

革命、の言葉に体がぴくりと反応する。
けど、いい。

「だったら、魔王さんが目指す、平和の完成って、なんですか？」

ぶつけてみた。
質問を。
期待を。

「そうですね――自分が今、幸せだと気付くことなく、平穏な日々が過ぎていくような、そんな世界でしょうか。平和ってなんだろう？　って、今自分がいる場所そのものが平和なことに気付かない。それが究極の平和なんでしょう」

「……そうかも、しれませんね」

返って来たのもまた、
質問で、
期待だった。

自由人。今も自由人。（後書き）

なんだか、けっこうな評価を得ている。
あらためて思ったことは、勢いって大事なんだな、と。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

自由人。今は恋するばか。

それから、数か月。
なんだかわたしは、ずっと魔王さんちに居座っていた。普通に普通に。
普通が一番と称さないわたしが、なんだか普通の生活をこれでもかというほどに謳歌していたのは、まあ、驚きと言えば驚きだった。

魔帝国は、平和そのものだった。
魔王さんの善政で、魔王さんの部下の尽力で、外界からの侵攻を感じさせないほどに、賑わい、発展していた。
ときどき、わたしが人間なのを見ると怖がる人もいたけど、最終的には、笑って接してくれた。人間とは大違いだ。
人間は、魔族を見るなり武器を持って立ち上がるのが善とするのに。
自分が、そんな人間だと思うと、少し恥ずかしくなったり。

まあ、そんな数カ月。
そんな数カ月後には、魔帝国には雪が降っていた。
北に位置するためか、一年を通して肌寒い気温の魔帝国だけど、この時期は特に寒いらしい。
わたしも、流石に執事服はやめて……執事服、真冬ヴァージョンにしてみた。
うん。動きやすいんだ、男モノの服は。
そんなわたしの奇っ怪な格好を見て、魔王さんは、「きれいです

よ」とほめてくれる。
なんていい人だ。わたしの一生の半分の半分の半分ぐらいを捧げてもいいかもしれない。
まあ、とにかく、冬で雪が降っていた。
そんな、感じだった。

◆◆（・A・）◆◆

戦争が、始まったらしい。
本格的な戦争。これまでの国境付近での、小賢しい小競り合いなんかじゃなくって、兵器と魔法と人員を大量に投入する、本気の戦争。
発端は、本当に小さなことだったのかもしれないけど。
人間に、子供を殺された魔族の親が、その人間を発狂しながら襲ったら、袋叩きに会って、息も絶え絶えのまま麻袋に子供と一緒に入れられ、魔帝国に送り届けられた。
それで、あくまでもポーカーフェイスを気取る魔王さんの制止を無視して、部下の数名が軍を率いて人間側の領土に侵攻。
戦争が、始まってしまった。
いつもどおりのわたしに宛がわれた部屋で、魔王さんと会話。

魔王さんも、いつもどおり。処世術。にこやかに微笑み。

泣いていたんだ。

「どうにか、ならないんでしょうかね」

「どうにも、ならないんでしょうね」

「僕が死んだら、どうにかなるかもしれません」

そんなことを、儚げに微笑んで言うから、言ってしまうから。

わたしは、また――――――がらにもなく、怒ってしまう。

「やめろ！　犠牲とか、代償とか、仮定とか、そんなこと死んでも言うな！　嫌いなんだよ、そういうの！　自分が死ねばとか、自分が無能だったからとか、そんなこと、今更言うなよ！　そんなの聞いたら――――――、」

――――辛いじゃないか……。

最後の言葉は、声には出せなかったけど、わたしは、俯いたまま、魔王さんの手を握った。

顔だけは、見せたくなかったから。

わたしは、感情を隠せないから。

「――――ほら、やっぱり優しいです」

俯いたわたしの、ばかなあたまを、信じられないぐらいあたたかな手で、撫でた。

それで、気付いた。

本気だって、いうことに。

自分が死ねば、どうにかなると、本気でそう思ってる。

だって、笑っているんだもの。いつもみたいに、笑っているんだもの。どうしようもないときみたいに、笑っているんだもの。

そんな笑いは、やめてほしいのに。本当に楽しい時だけ、本当にうれしい時だけ、笑っていてほしいのに。

だけどあなたは、笑います。

「人間の奴らなんて、消えされればいいのに。腐ればいいのに。……死ねばいいのにっ」

「誰でも、平等ですよ。せーちん。誰でも平等に、平等に扱われるべきなんです」

「そんなこと、不可能じゃないですかっ。今までの世界のどの歴史にだって、そんなことはなかった！　全部不平等から逃れようとして、平等を求めて戦争をしたけど！　そんなの、不平等しか生まなかったっ！」

わたしは、顔を俯かせたまま、声を大にして叫んだ。

部屋の外に聞こえるんじゃないかと思うくらい、いや、絶対に聞こえている。
つーんと響いた後、しーんと、静まった。
その中でも、くすっ、と、魔王さんは笑っていた。
「それでも、諦めるなんて出来ないでしょう？　みなさんが、平等に平和を謳歌できる世界。それを諦めるなんて、僕には死んでも出来ません」
無茶無謀無理なんてことは、魔王さんはわかっていた。
だけど、そこに選択肢として、諦めるという項目が最初からなかっただけのことだった。
どこまでも、革命家なんだと思う。
だけど、わたしだって――わたしだってっ！
「わたしは、わたしはっ！　――――魔王さんに、平等に扱ってほしくなんかないっ！　あなたの唯一の不平等でいたいっ！」
――恋（ばか）する、女の子なんだっ！
「……ふふ。そうですか、なかなか、詩的な表現をお持ちですね、せーちん」
わたしの俯いたままの頭に、また手が置かれ、今度は少しだけ強く撫でられた。
……恥ずかしい。

「せーちん――いえ、セフィリアさん。セフィリア・アイミーシャさん」

わたしの、名前。

それを、やわらかにささやいてくれる。

忌むべき証のはずなのに、あの国の人たちに聞かれたら、絶対に殺されてしまうような名前なのに。

やさしく、ささやいてくれる。

「僕も、です。――平等で平和な世界になっても、あなただけは不平等に扱いたい」

……わたしには、頬を伝って落ちる、あたたかな何かの名前はわからないけど、それは、嫌なものばかりじゃないってことだけは、わかった。

ベッドのシーツに斑点模様の染みを創るわたしを見て、魔王さんは笑った。

それが本当に楽しくて、うれしくて出た笑いなら、なら、わたしは――、

「――――とっても、うれしいですっ」

そう言って、下ばかり見ていた顔を、あたたかなあの人に向けて、上げてみた。

◆◆ (^･ｰ^ ʒ･ｰ^) ◆◆

自由人。今は恋するばか。（後書き）

アコースティックギターの音色ってすごい。
頭の中で反響して、なんだか、不思議な気分になる。

ご感想ご批判ご指摘等々、お待ちしております。

恋するばか。今は真・恋するばか。

あのあと、なんとなくだけど、甘いキスをしてみて、だけど、無粋なむふふな展開にはならなくって、それは少しだけ残念で、だけど魔王さんらしいっちゃ魔王さんらしくて、最終的総合評価は――――うれしかったっていう、惚け話だったりした。

今では、なんだか魔王さんの言葉一つ一つがうれしいという、恋愛初期状態にありがちな状態に陥ってしまったわたし。だけども、それは決して悪い気分なんかじゃなくって、逆に幸せで、がらにもなく一日中笑っていたい気分だったけど、それはわたしの意地とプライドがさせなかった。

とにかく、翌日は、政務で忙しい魔王さんがいない自室で、枕を抱きしめながらあのときのことを思い出して、呻っていた。

わたしって、結構女の子らしいところがあったみたいで、自分の言葉に赤面したりだとかは今までもあったけど、魔王さんの言葉で赤面するとか、恥ずかし過ぎる。

「よ、よしっ。小説を書こう」

自分でもわけのわからんことを言っているとは思うけど、今の気持ちを小説にしたら、それはもう甘ラブの小説が書けると思うんだ。

この世界では、既に紙は大量生産できるもの。軟木をパルプにする技術が体系化されて、その不純物を取り除くのは魔法での分離式

で行って、製紙は蒸気機関を使って一気に。
王女の、広く浅く方式の勉強の仕方じゃ曖昧だったけど、紙は結構リーズナブルなお値段で取引される。

わたしは机に向かうと、魔方式の羽ペン――魔力を込めるとインクの代わりに書ける――を手に取り、引き出しから紙を一枚取り出す。

あらすじは、そうだな。
一人の執事と下級貴族のお嬢様の恋愛ファンタジー、なんてどうだろうか？

よしっ、書くぞっ。

◆◆（・・）φメモ◆◆

しんしんと、雪が降っている。なんだか、雪があたたかく見えてくる。ふんわりと、まるで綿のようにわたしの髪に降り積もる雪は、本当に柔らかくて。舌をぺろっと伸ばせば、舌先に乗っかった雪はすぐに溶けて、ひんやりとわたしの体温を奪っていった。

う～、執事服真冬ヴァージョンでも、結構きついよ～。
久しぶりに外に出てみたら、こんなに寒かったんだね、ほんと寒い。

だけど、うん、雪ってきれいだな。純潔とかってイメージがあるのも頷ける。

「息が白いぜ、はぁーはぁーっ」

執事用の白い手袋、機能性重視すぎて、まったくもって防寒具じゃねえ。やべえ、せっかくあたたまってきたわたしの心が、どんどん寒空に曝されていくよう。

雪をするっと滑って地面に降り積もって行く雪は、柔らかそうに見えて、突き刺すように冷たい。こう、ざすざすって刺さるみたいな感じがする。

後頭部は禿げてるけど、顔面はものすごくイケメンだったときみたいに、わたしの肌にぐさっと……。

「なんでわたしが外に来たというとね？　なんとなくさっ。ははっ！　笑ってくれたまえ」

うん、寒過ぎておかしなことを言っているけど、本当になんとなくで外に出てみただけ。基本的にアクティヴなわたし。雪なんかで外に出るのを躊躇わないけど、寒い。寒過ぎる。

うーん、けど、こう、指の先から体温が退いて行く感覚ってのは、結構好きかな。なんだか、死んでるみたいだし。死んでいってるみたいだし。

こうやって死んでいくんだ、ってわかってたら、死ぬ時は結構落ち着いて死ねると思うし。予行練習してるみたいで、わたし、結構な努力家。

「ばかかっ。死ぬ練習してどうする」

そう言って、チークも塗っていないのにりんごのように紅く染ま

った頬を、両手でぱしんと叩いた。想像以上に痛くて、少し、涙が出た。

「それにしても、人通りが少なくなっちゃったな」

城下町のはずなんだけど、人通りが少ない。数か月前は、城から真っ直ぐに繋がっているこの中央通り、メインストリートには溢れるように人がいたものなんだけど、今はちらほらとしか見受けられなくなっちゃった。

魔王さんは決して強制はしなかったけど、兵士の募集で、かなり多くの人たちが集まったらしく、そのことでまた悩んでいた魔王さんだったけど、結局、ほとんど戦場に送ってしまったらしい。

それで、自分の店の若い衆を失ったので、このありさま。お店の経営は細々となってしまった。けど、魔王さんが昔から出していた備蓄令かなんかのおかげで、どの家庭にもそれなりの備蓄があって、生活にはあまり困っていないらしい。

本題の戦争では、拮抗状態にあるらしい。

けど、その拮抗状態が一番消耗が激しい。攻めにも受けにも回れないその苛立ちは、だんだんと両陣営を蝕むだろうからって、魔王さんは焦っていた。

そんな、あれこれ。

そんな、あれこれの中、わたしは小説を書いていて、今はそのクライマックスあたりで、今は気分転換。なんとなくの、外出。

そんな、何の期待も無い気分転換だったけど――――後ろの雪が、きゅっきゅっと踏みしめられる音がした。

「せーちん、こんなところにいては、風邪をひきますよ？」

「魔王さんこそ、風邪をひいちゃいますよ」

「ふふ、なら、一緒に帰りましょうか」

そう言って、わたしの手をあたたかなその手で握ってくれる。

ほんとうに、あたたかった。

「魔王さん、ありがとう」

「せーちん、こちらこそ」

わたしと魔王さん。

二人で互いをあたため合いながら、冷たい雪の中、一緒に帰った。

……帰る場所があるのって、すごくしあわせなんだって、このとき、初めて気付いた。

恋するばか。今は真・恋するばか。（後書き）

声を嗄らして叫んだ……。

って、本編のことについて触れると、あまらぶになってきやがったっ！

ご感想ご批判ご指摘等々、お待ちしております。

うん、あと少し。

真・恋するばか。今は超絶・恋するばか。

戦争激化。
魔帝国の帝都である、わたしがいる場所にどんどん、砦や要塞を壊して進んできているらしい。最前線で防衛線を敷いている部隊からの話によると、阿鼻叫喚・地獄絵図とのこと。
まさしく、地獄を見た、とのことらしい。

その先頭に――ここ数カ月で、伝説の剣やら、光属性の魔法やら、最強の剣技やら、また新たなハーレム要員やら、それ全員チート性能やら、合体技やら（合体という響きがあのアホの子らしいっちゃらしい）、とにかく勇者さまがいたらしい。

死ねばいいのに。

どうせ、その先陣を切る際、「おのれ魔族どもォオ！」とかって叫んでたんだろ。
ほんと、どうでもいいよ、あいつ……勇者さまのことなんて。
そんで、あの性格で突っ込んでこられるんだから、本当に性質が悪いのでございます。
死ねばいいのに。

それにさ、勇者さま、一緒に来るかい？　とかわたしに言っておきながら、結局ハーレム要員増やしやがってる。
そんなの、女からしてみれば最悪なだけではございませぬか。

好きだったら、いくら取り巻きが増えようと関係ない？
男の妄想押し付けんなよタコ野郎……っと、また口が悪く。

けどな、わたし、勇者さま――ウェルナさんと、どっかで会ったっけ？
あの人は、イーケット王国の第二王子だから、会ったと思われるのは、わたしが王女だったころかな？

……少年時代、……ショタ、……可愛い少年、……今はイケメン、……ん？

「なんだか、会ったような気がする」

もしこれが、あのアホの子、馬鹿王子が、わたしが魔帝国の魔王にさらわれたと勘違いしてやってきたのだとしたら、きっとわたしは――わたしを許さない。

わたしは、薄暗い明りを灯す燭台に顔を向けて、溜め息を吐いた。
手に持っているのは羽ペン。寒さで少しかじかんで、文字が汚くなってしまった。ストーリーはあのまま続行で、執事と下級貴族はあまらぶ、というより、今のところ主従関係をなんとか続けているってところかな？

執事マジ最強。
お嬢様マジヤンデレ。

……はあ。

「わたしの中の妄想、か」

……そんなの、いつだってバッドエンドじゃねーか。くそやろう。

◆◆（゜Д゜）ゴルァ◆◆

魔王さんが、とうとう最前線に赴くようになった。
魔王さんの場合、指定の場所から場所まで瞬時に移動できる魔法を使えるみたいだから、戦闘が落ち着いたら帰ってくる。だけど、その雰囲気は別モノで、肌に突き刺さるというか――本物の魔王、だった。

魔王さんは自分のお父さんと自分は似ていないとか言っていたけど、それ多分まるっきり嘘。本当は似過ぎていて、それを押さえるのに必死で、真逆の性格になってるだけだ。
小耳にはさんだ噂でも、魔王さん、戦場で高笑いを上げてたとかなんとか。

……うん。わたし、揺るがねえ。

いちいちそれぐらいじゃ動じない。わたしが好きになった人は、魔王。決して魔王と言うのが名前じゃないけど、ここは一貫して魔王さんと呼んでおこう。その魔王さんは、本来の魔王とかどうとかには縛られない人、だと思う。
だから、その魔王さんは、魔王さん自身で――本名を使えば分かりやすいと思う。

戦場で高笑いを上げていたアルベルさんは、本来の魔王としてではなく、アルベルさんはアルベルさんとして、怒り、吼えたんだと思う。

本名を使うのは気恥かしいので、以降は魔王さん統一。

「せーちん、ちょっと、いいですか？」

「いいですよ」

そう言って、わたしは――ベッドの上に押し倒されて、って、ええ？

お、落ち着いて聞いてくれよ！？　い、今、たった今のお話だ、銀髪の髪したオッドアイのめちゃくそイケメンな青年がわたしの顔に顔を近づけてきてんの。やっべー、まじやっべー。

「ちょ、魔王さん？」

「……すみません、せーちん」

そう言って、わたしの執事服室内ヴァージョンをぐっしゃぐっしゃと紙きれのように引き裂き始めた。

顔が、怖かった。

初めて魔王さんを、怖いと思ってしまった。

「ま、魔王さ」

「……すみません、すみませんすみませんすみませんすみませんすみませんすみませんすみませんすみませんすみませんすみ

みませんすみません」
なおも、わたしの服を破くのをやめない魔王さん。
だから、わたしは――、
「魔王さんっ！」
「……やはり、嫌、ですよね」
「はい、嫌です。わたしは凌辱があまり好きじゃありません」
「……そのつもりは、」
「だから、優しくしてください。激しくすれば女が喜ぶだなんて思わないでくださいね？　そんなの男の勝手な妄想ですから。デリケートな部分を弄る際には、本当にデリケートに。強く弄くられたってマジで痛いだけですから。そこんとこ、ヨロシクっ！！」
――この人の全てを、受け入れようと、頑張ってみる。
「……せーちん」
「で、ですね？　魔王さん、その――経験とかは」
「ないです」
おうふっ。
そんな堂々と言われても、こっちが赤面するだけ。いや、なんで嬉しいとか思ってるわたし。
っていうか、

「……わたしも、です」

……言わんせんなよ、恥ずかしい。

「で、ですのでですね？　そ、その、ほんと、わたし知識だけはホーフなんで、わからないことあったら言ってもらえると非常に助かります。痛いのはヤなんで。どうせなら、気持ち良くなりたいんで」

「……ありがとう、ございます」

まあ、なんだかんだ言って――わたしも、女だったということとか、な？

また近づいてくる顔に赤面しながら、……赤面する表現を使うとすると、うん。

淡い光に照らされたわたしたちの影が、一つになりましたとさ。

◆◆（ー３ー）◆◆

真・恋するばか。今は超絶・恋するばか。（後書き）

さて、もーすぐクライマックス。
ハッピーエンドを予想している紳士淑女の方々。
バッドエンドを予想している紳士淑女の方々。

やっと、緊張の糸がほぐれますねっ。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

あと、女性と、その……えっちぃことをする際は、用方用量を……
じゃなく、きちんと相手のことも考えてあげましょう。

……ゼロの僕が、何を言ってんだべさ。

ハッピーエンドとバッドエンド

とある雪がじゃんじゃん降る日。
わたしは、なんだか胸騒ぎがして、いや、胸騒ぎがしなかったとしても、わたしは魔王さんの転移魔法にこっそり紛れて、最前線へと向かった。
女の勘ってのは、信じた方がいいってお母さんも言ってたし、うん。一応、護身用のナイフ持って行こう。

けど、後悔した。

鼓膜が吹き飛ぶような爆音。大地が引き裂かれるような衝撃波。悪魔の子守唄のように呟かれ続ける魔法の詠唱。
わたしは、結構前に（子供時代。所謂ロリ期）習った、衝撃緩和系魔法を身に纏い、陣営の間を隠れながら移動していく。わたしの顔ってば、魔帝国では結構有名だから。魔王のフィアンセだとか、めっちゃ持ち上げられて、めっちゃ喜ばれて。

……思い出しただけで、涙でそう。

「これが、前面衝突」

今まで戦力的には圧倒的に勝ってる人間達が、なんで魔帝国に踏み込まないかが分かった気がした。
それは、魔族の魔法技量の高さ。人間達が一時間かけて編み出す

大魔法を、一、二分程度の詠唱で済ませて、大規模火力で攻める魔族。まるで魔力が壁となっているかのように、人間の軍勢が吹き飛ばされていく。

だけど、人間達はそれを、技術の面でカバーしていく。機械仕掛けのアイアンゴーレム。上手く調教した白龍。高い技術で鍛錬された武器、防具。

そして――、

「行けええええええええええええええええッ！　今日こそは、突き破れえええええええええええええええ！！」

叫び声を上げる、『勇者』と、その御一行。

勇者の伝説の剣の前ではどんな防具も紙きれ同然で、取り巻き共が使う魔法は、魔族の猛者たちをもしのぐレベルで発動され、拮抗という形を完璧に崩していた。

そんな勇者御一行の前に立ちふさがるのは、

「魔王さん？」

あやしく、いつもどおりにこやかに微笑む、魔王さん。

「――構えてください。じゃないと、あっけなく死んでしまいますよ」

蹂躙が始まった。

◆◆（（ 。Д 。））ガクブル◆◆

転移系魔法を突き詰めると、ここまでの惨状になる。
大地を引っぺがし、空気を奪い、自らは光よりも速い速度で場所を変え、全方位に瞬時に移動するその姿を、勇者さんたちは感覚で掴むのが精一杯だった。

「魔王さん」

それでも、魔王さんは手加減をしているように見えた。
止めをさせる、そのとき、というところで、ほんの少し力を緩め、あえて敵の攻撃を喰らって、わざと戦いを長引かせているような。

もう、空気を切り裂く音と、破壊の傷跡だけが、わたしにその戦いの壮絶さを物語っていた。
もちろん、勇者さまだって、ただ嬲られるだけじゃなく、自らも高速移動して攻撃を当てづらくさせたり、取り巻きも凄まじい戦闘力で援護している。

……わたしだって。

だけど、きっと――そんなのは、邪魔になるだけだから。
これから魔王さんがしようとしていることに、わたしの存在は邪魔なだけだろうから、わたしは、わたしは――わかんない。

「魔王さん」

ただ、そう呟くしかできない。

気を散らすことさえためらわれる。あの人は、そこまで本気で――人も魔族も、平等に助けようとしているから。善も悪も、平等に抱擁する覚悟を持ってるから。

だから――、

「魔王さん」

――死なないで、ほしい。

そのとき、なんだかお腹のあたりに威圧感を感じた。

そして、わかった。

なんで、いままで気付かなかったんだろう。

わたし程度が、必死になって気配を隠そうとしたって、あの人たちにはばれてるっていうことを。

「汚いなんて、思いませんわよね？」

「エル・ウェグナーさん……」

『連立世界』

有する魔法は、たしか、――次元断絶系魔法。

彼女自身も、その中に入って、時間及び敵の攻撃を一切寄せ付けない、らしい。

そんな彼女が、わたしの前に突如として出現した。

「思います」

「ふんっ。言っておきなさい」

強引にわたしの腕を掴み、そして、

「魔王よッ！　これが、噂の女かしらっ！」

……汚いと思う。

◆◆（゜Д゜）ポカーン◆◆

「……せーちん」

魔王さんと、勇者さんが戦いの手をやめて、こっちの方を見てきた。

魔王さんも勇者さんも、目に浮かぶのは驚愕の色。

「君はっ」

勇者には興味ない。

「……せーちん、なんで」

「つ、ついてきちゃいました。て、てへへ」

強く握りしめられた腕が、千切れ飛びそうなほどに痛い。びぎびぎと音を立てながら、取り巻き一号エルさんの指が、わたしの手首にめり込んでくる。

「これで、終わりね。魔王」

「……そうですね」

魔王さんが切なげに笑うと、構えていた体勢を解いて、両手を挙げた。

「ちょっ、何言ってんですか魔王さんっ！　わたしがミスったんだから、わたしごとやっちゃえば」

「出来るわけないです」

即答だった。

速攻で涙が出た。

わたしの頬を伝って、地面に落ちる。

そこに、もう説明なんてものはいらない。

周囲で轟音が響き、捕えられたわたしは、涙を流しながら魔王さんを見ていた。

爆撃が地面を抉り、獣のような雄叫びが大気を揺るがしている。

その中で、わたしと、魔王さんと、勇者さん、その他取り巻きは、静かに時間を止めていた。

「……さあ、幕を引きましょう、勇者殿」

「……あの女性と、お前の国は、きちんと俺が守ってやる」

「……なんだ、心配は、ご無用ってやつですか」

声が喉まで出かかって、止まった。

「……本当なら、魔王（おまえ）とだって」

「もう、そんな甘ったるい結末ではこの戦争は止まりません。諦めて――初めてわかってしまいました。僕か、勇者（あなた）。どちらかが死ぬまで、この戦争は終わらないと、やっと、わかりましたから」

無抵抗の魔王さんに向かって、勇者さんは伝説の剣を振り上げる。

わたしは、エルさんが掴んでいる腕をふりほどいて近寄ろうとするけど、彼女はそれを許さなかった。より一層強く腕を握りしめながら、彼女はわたしを睨みつけた。

「は、放せっ」

「わかりなさい。勇者が魔王を討つ。これが、現状でもっとも被害が少なくて、犠牲が無い終わり方なのよ」

「知るかっ！　魔王さんが犠牲に」

「わかりなさいと言っているのよッ！」

それでも、だから。

わたしは、懐にしまっていたナイフを取り出すと、魔法を発動する。
わたしの魔法は――付加魔法。物体に効果を加える魔法。
あんまし練習していないから、練度は低いけど、斬撃強化なんてものだったら、腕の一本ぐらい簡単に斬り落とせる。
わたしは、ナイフを振り回して――――左手首を切り落とした。
「あ、なた」
「ッ！？　魔王さんっ」
わたしは、痛みを忘れて走っていた。
涙と鼻水が入り乱れた顔で、わたしは全力で走っていた。
近づいてくるわたしに魔王さんは気づいたのか、びっくりしたような顔をした。
わたしは、もう、剣が振り下ろされているのもわからなかった。
わたしは、その、剣と魔王さんの間に飛び込んだ。
剣に背を向けて、魔王さんの方を向いて。
そこで、ようやく気付いた勇者さんが剣を止めようとしたが――遅かった。
魔王さんもろとも、わたしの身体は、切り裂かれた。
……そこから噴き出す血は、たとえようもなく、紅かった。

紅かった。
紅かった。
紅かった。

勇者さんの叫び声が、耳に響いた。

……死ねば、いいのに。

◆◆（、ω、）ギャッ◆◆

「けぽっ」

口から、紅い液体が溢れだしてきた。どうやら、内臓まで傷は届いているらしい。

死亡フラグ、建て過ぎたかなぁ。

「まおー、しゃん」

「せー、ちん。ばか、なんですか？」

「え、っへっへ。恋する女の子と書いて、ばか、とよみましゅ」

喋るたびに、紅い液体が零れ落ちた。鉄臭くて、まるで飲めたもんじゃない、ぬめっとした液体。

「ま、あ……僕も、人のこと、いえないですけど」

「ちがい、ないです」

半身を引き裂かれたわたしと魔王さんは、お互い向き合って、冷たい雪の上で倒れていた。

そんな魔王さんの顔は、なんだか、とっても嬉しそうで――――。

「ふしぎ、ですね。音が、まわりの音が聴こえません」

「そう、ですね」

魔王さんの、魔法だろうか。

だとしたら――いい演出、だな。

「魔王、さん」

「はい」

二人でお互い血を吐きながら、なんとか返事をした。

「戦争、おわって、よかったですね」

「そう、言ってくれるのは、せーちんだけ、ですよ」

――戦争は、終わった。

小説や英雄譚みたいに、綺麗には終わらないだろうけど――終わり始めた。

やっと、やっと訪れた平和な時間も――あと、少し。
わたしと魔王さんには、あと、少ししか用意されていなかった。

「魔王、さん。――アルベル、さん」

「なん、でしょう。セフィリアさん」

「最後は、ごめ、なしゃぁ……」

「まったく、セフィリアさん、らしい」

ははっ、と、また笑い合う。
ほんと、あっけない。なんてさっぱりしてるんだろう、この人は。

「アルベル、さん……」

「セフィリア、さん」

目が合って、気が合って、心が『会った』。

最初は、偶然だった。
偶然、勇者さんが乗りこんできたのが、わたしが属する娼館で。
偶然、勇者さんにわたしが全然惚れなくて、逃げだして。
偶然、逃げだした先で、魔王さん扮する似非冒険者と出会い。

そして――、恋した。

そんな、わたしが出すべき言葉は、やっぱり、一つしかないんじゃないかと、思う。

わたしと魔王さんは、目を合わせて、呼吸を合わせて、言った。

「「愛してます」」

右手を伸ばしたけど、それは、もう――届かなかった。
届かなかったけど、けど――。

――――それじゃあ、また、アルベルさん。

――――また会いましょう、セフィリアさん。

『ありがとう』

ハッピーエンドとバッドエンド（後書き）

平和を求めた青年は、平和が叶ったその現在にはいることが出来なかった。
その青年を愛した少女は、心置きなく愛し合える時代には、存在し得なかった。

愛を知った。
愛を貰った。
愛をあげた。
愛を深めた。

それは、『愛』でもあったし『哀』でもあった。

青年は少女を愛した。偽りなく。
少女は青年を愛した。嘘を吐かず。

死ぬまで。死ぬまで。死ぬまで。

――――そして、死んでからも。

伸ばした手は、握られていた。
握った手は、離されなかった。

曖昧で有耶無耶で、喉に突っかかりそうな違和感を覚えながら、

虚勢を張り嘘を吐き、仮面を被り相手を騙しながら、全てを真っ黒に塗り潰して何もかもわからなくなった、彼と彼女の物語は、終わった。

さようなら、とは言わなかった。

だから、きっと彼と彼女は――別れることは無い。

そしてそれは、また違った、幸せのカタチだったのかもしれない。

それを決めるのは、彼と彼女であり――これを読んだあなたであると思う。

それでは、ここで筆を――キーボードを打つのをやめさせてもらいます。

廻の次回作とやら、待っていただければ、幸いです。

それでは。

^―^

（・ω・）ノシ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8329y/

奴隷王女の「死ねばいいのに」は結構辛い。

2011年11月29日21時52分発行